

## 英語と日本語の核強勢規則と複合語規則

田 中 章

## 1 はじめに

英語の核強勢規則と複合語規則はそれぞれ次のような例を説明するためのものである。<sup>1</sup>

(1) a. 1 2 b. 1 2

Jesus wept Madison Avenue (句)

(2) a. 2 1 b. 2 1

Madison Street teachers union (複合語)

HV は(1), (2)に対して各々次のような韻律格子 (metrical grid) を付与している。

(3) a... \* b... \*... ライン4

.....

(\* \*) (\*..\*).. ライン3

Jesus wept Madison Avenue

(4) a.\*... . b.\* . ... ライン4

.....

(\*..\*) (\* .\*).. ライン3

Madison Street teachers union

そしてHV は(1), (2)のような例を説明するために、各々次のような規則を定式化している。

(5) 核強勢規則 (*Nuclear Stress Rule*)

a ラインN (N ≥ 3) 上のパラメータ指定は [+HT, -BND, right] である。

b 2語以上の強勢のある語からなる統語構成素の境界を韻律境界と解釈せよ。

c ラインNの構成素の主要部をラインN+1上に置け。

(6) 複合語強勢規則 (*Compound Stress Rule*)

2語以上からなる構成素Cにおいて、Cの右境界をCの主要部の直前の位置に左方移動せよ。ただし、Cは語彙範疇によって支配され、Cの主要部はCの最後の語にあるものとする。

この他にも、(5)、(6)に付随する規則として、強勢均等化規約 (*Stress Equalization Convention*)、格子簡単化規約 (*Grid Simplification Convention*)、リズム規則 (*Rhythm Rule*) などがあるが、必要となれば随時説明することにする。

さて、(5)、(6)が(3)、(4)に適用されて、どのようにして(1)、(2)が派生されるかを示すことにする。まず、(5)についてであるが、(3)のライン3上では、(5a)、(5c)によってライン4上に正しく星印がおかれている。また、(5b)は統語境界 ([...]) を韻律境界 ((...)) に正しく変えている。問題は(4)であるが、この派生は次のようになる。

(7)

a. . . . \* b. . . \* .. ライン4

.....

(\* . . \* ) ( \* . \* ) .. ライン3

Madison Street teachers union

(8)

a. \* . . . b. \* . . . . ライン4

.....

(\* ) . . \* ( \* ) . \* .. ライン3

Madison Street teachers union

(7)はライン4上で右側(の語の上)に星印があるので、(5)が適用された

構造となっている。HVは英語の複合語の中には句と同じ強勢型(すなわち、韻律構造)をもつものがあるので、最初は何の複合語の場合も(5)が適用されるとする(詳細については、7.9.3節参照)。本稿においても、これと同じ考え方が日本語の複合語についてもあてはまることを示す。次に、(6)が適用されて(8)が派生される。

## 2 理論的背景

本稿では、Haraguchi(1991)、田中(1993a,b)、Halle & Kenstowicz(1991)(以降、HK)を参考にして、日本語の核強勢規則と複合語規則を次のように定式化する。

### (9) 核強勢規則(Nuclear Stress Rule) (Japanese) <sup>2</sup>

- a ラインN ( $N \geq 2$ ) 上のパラメータ指定は [-BND, left] である。<sup>3</sup>
- b 2語以上の強勢のある語からなる統語構成素の境界を韻律境界と解釈せよ。
- c ラインNの構成素の主要部をラインN+1上に置け。

### (10) 複合語規則 (Compound Stress Rule) (Japanese) <sup>4</sup>

2語以上の「強勢のある語」からなる構成素Cにおいて、Cの「左」境界をCの主要部の「直後」の位置に「右方」移動せよ。ただし、Cは語彙範疇によって支配され、Cの主要部はCの「最初」の語にあるものとする。(10)は、Haraguchi(1991)にならって、次のように定式化することもできる。

### (11) 複合語規則 (Compound Stress Rule) (Japanese)

$\alpha$ を移動せよ (Move  $\alpha$  ( $\alpha$  = left boundary of C))

(11)は次のようなHaraguchi(1991:8、他)の「下接条件(Adjacency Condition)」に従う。

### (12) Adjacency Condition <sup>5</sup>

強勢の移動の着地点は強勢が動かされる位置に隣接していなければならない。(The landing site for stress movement must be adjacent to the

position from which the stress is moved.)

3 論証 以上を念頭において、日本語の句と複合語の派生を示すことにする。

3.1 核強勢規則 まず、次のような句について考える。

- (13) a. 美しい花 (<うつくしい, はな) b. 火がついた (<ひ, ついた)<sup>6</sup>  
 c. 頭を下げる (<あたま, さげる) d. 逆宣伝の効果 (ぎゃくせんでん,  
 ごうか) e. 硬貨の種類 (ごうか, しゅるい) f. 絵の展覧会 (え, てん  
 らんかい) g. 官報の記事 (<かんぽう, きじ) h. サロンに集まる (<  
 サロン, あつまる) i. 野放図に振る舞う (<のほうず, ふるまう) j.  
 さらさらと流れる (<さらさら, ながれる) k. うぶに見える (<うぶ,  
 みえる) l. 粗衣粗食に馴れる (<そいそしょく, なれる)
- (14) a. 花のつぼみ (<はな, つぼみ) b. 家の造り (<いえ, くり)  
 名詞句の代表例として(13a), 文は(13b), 動詞句は(13c) (他動詞),  
 (13h) (自動詞)「-の-」という句は(13e) (記述の属格), (14a) (所有  
 の属格) について派生を示すことにする。

(15) (= (13a))<sup>7</sup>

. . . \* . . . ライン 3  
 . . . \* . . \* NSR(9) . . . (\* . . \*) ライン 2  
 utsUkushii hana → utsUkushii hana

(16) (= (13b))<sup>8</sup>

\* . . . . ライン 3  
 \* . \* . . NSR(9) (\* . \*) . . ライン 2  
 higa tsu ita → higa tsu ita

(17) (= (13c))<sup>9</sup>

. . \* . . . . ライン 3  
 . . \* . . \* . NSR(9) . . (\* . . \*) . . ライン 2  
 atamao sageru → atamao sageru

(18) (= (13h))

\* . . . . . ライン 3

\* . . . . . \* . NSR(9) (\* . . . . . \*). ライン 2

saronni atsumaru → saronni atsumaru

(19) (= (13e))

\* . . . . . ライン 3

\* . . . \* .. NSR(9) (\* . . . \*).. ライン 2

kookano shurui → kookano shurui

(20) (= (14a))

. \* . . . . . ライン 3

. \* . . . \* NSR(9) .(\* . . . . . \*) ライン 2

hanano tsubomi → \*hanano tsubomi

この派生から、(15)から(19)までは核強勢規則(9)で問題なく正しい強勢型が得られることがわかる。問題は(20)であるが、これはどのように説明したらよいであろうか。本稿では、(19)のような記述の属格の「の」と、所有の属格の「の」は異なる核強勢規則をうけるものとする。(19)はいままで核強勢規則(9)で説明できるが、(20)は次のような核強勢規則で説明するものとする。

(21) 核強勢規則 (*Nuclear Stress Rule*) (Japanese)

a ライン  $N$  ( $N \geq 2$ ) 上のパラメータ指定は  $[-BND, right]$  である。

b 2語以上の強勢のある語からなる統語構成要素の境界を韻律境界と解釈せよ。

c ライン  $N$  の構成素の主要部をライン  $N+1$  上に置け。

そうすると、日本語の核強勢規則は次のようにまとめることができる。

(22) 核強勢規則 (*Nuclear Stress Rule*) (Japanese) (modified)

a ライン  $N$  ( $N \geq 2$ ) 上のパラメータ指定は  $[-BND, left]$  である。

(所有の属格の場合のみ [-BND, right])

b 2語以上の強勢のある語からなる統語構成素の境界を韻律境界と解釈せよ。

c ラインNの構成素の主要部をラインN+1上に置け。

ちなみに、英語の「所有の属格」の場合は核強勢規則(5)で説明できるので、日本語のように記述の属格の場合とパラメータが異なることはない。念のため、例を下にあげておく。<sup>10</sup>

(23) 1                    2

Jenifer's relative

3.2 複合語規則 まず、次のような例について考える。

(24) a. 商学部 (<しょう, がくぶ) b. 絵本 (<え, ほん) c. 座禅 (<ざ, ぜん) d. 世界 (<せ, かい) e. 極楽 (<ごく, らく) f. 大刀 (<だい, どう) g.

(25) a. 艇長 (<てい, ちょう) b. 文武 (<ぶん, ぶ) c. 草木 (<くさ, き) d. 夜昼 (<よる, ひる) e. 価値 (<か, ち) f. 正史 (<せい, し) g. 各所 (<かく, しょ) h. 社会 (<しゃ, かい) g. 短命 (<たん, めい) h. 野火 (<の, ひ) i. 月夜 (<つき, よ) j. 種火 (<たね, ひ)

(26) a. 汽車 (<き, しゃ) b. 機械 (<き, かい)

(27) a. 海坊主 (<うみ, ぼうず) b. 会議 (<かい, ぎ)

(28) a. 心理学 (<しんり, がく) b. 富山県 (<とやま, けん)

これらの例を説明する前に、第一節でのべたように、本稿では、日本語の複合語も英語の複合語と同じように、核強勢規則がすべての場合に適用され、それから、複合語規則が適用されるものがあるとする、ことを想起されたい。上の(24)は複合語の第二要素にアクセントがあり、(25)は第一要素にアクセントがある。(26)–(28)は特殊な例である。(26)は本来は第一要素にアクセントがあるのであるが、「高母音無声化」によってアクセントが第二要素に移っている。

(27)は古い発音では、第一要素に、新しい発音では、第二要素にアクセントがある。(28)は第一要素と第二要素のアクセントの位置とは異なる位置にアクセントが移っている。以下、代表例について順を追って派生を示すことにする。

(29) (= (24a))

\* . . . . . . . \* . . .

\* . \* . . NSR(9) (\* . \*) . . CSR(11) \* . (\*). .

shou gakubu → shou gakubu → shou gakubu

(30) (= (25a))

\* . . .

\* . \* . NSR(9) (\* . \*) .

tei cho u → tei cho u

(31) (= (26a))

\* . . . . . \*

\* \* NSR(9) (\* \*) HVD<sub>11</sub> . (\*)

ki sha → ki sha → kI sha

(32) (= (27a))

a. (古い発音)

\* . . . . .

\* . \* . . NSR(9) (\* . \*) . .

umi bo uzu → umi bo uzu

b. (新しい発音)

\* . . . . . . . \* . . .

\* . \* . . NSR(9) (\* . \*) . . CSR(11) \* . (\*). .

umi bo uzu → umi bo uzu → umi bo uzu

(30), (31), (32a) では、複合語の第一要素にアクセントがあるため、NSR(9)のみが適用されている。ただし、(31)では、NSR(9)に加えてHVDも適用されている。次に、(29), (32b) では、複合語の第二要素にアクセントがあ

るため、NSR(9)に加えてCSR(10)(=(11))も適用されている。

#### 4 これからの課題

本稿では、スペースの都合もあるが、句の例はだいたいあげたが、複合語の例は一部分をあげたに過ぎない。例えば心理学 (<しんり, がく), 富山県 (<とやま, けん) のような、複合語の第一, 第二要素のいずれとも異なる位置にアクセントをもつものなどはあげていないし, もっと長くなる複合語もあげていない。これらは, 次の機会に扱うことにする。

#### 5 おわりに

日本語と英語の核強勢規則と複合語規則は, パラメータの一部分を変えるのみで問題なく説明できることを示した。

#### 注

- 1 以降の例における数字は問題となる母音にむすびついている星印 (asterisk) の数を表す。ただし, 英語の場合は句の場合も複合語の場合も, 語のライン, すなわち, ライン2ないし3より上のライン上の星印の数であることに注意。詳細については, Halle & Vergnaud(1987) (以降, HV) など参照。日本語の場合は, これから見てゆくように, ライン2より上のライン上の星印の数となる。また, 以降では, 断らない限り, 例はHVの7.9節のもの。
- 2 日本語の句には, 句を構成する要素のうち片方しか強勢をもたないものがあるが, そのような場合は, この規則では説明せずに, 単に「連結 (Concatenation)」(Halle & Mohanan (1985) (以降, HM) など参照) で説明することになるが, 派生については後で示す。
- 3 HVのパラメータ [+HT] はHaraguchi (1991) に従い, 廃棄する。このことについては, 田中 (1993b) の注3参照。
- 4 この複合語規則の定式化中の「」はHVのものとの相違を示すため。



- 5 下接条件のこの定式化はHaraguchi(1991:223, 他)では次のように一般化されている。「規則は隣接している要素にのみ影響を与えることができる(が, ある数のパラメータによる変異がある(Rules can affect adjacent elements only (with a certain number of parametric variations))」ここでは, リズム規則は移動のみと考えるので, 最初の定式化で十分である。
- 6 文はSPE以来, 句の中に含まれてきたし, 最近のチョムスキーらの研究においてもInflection (Infl)を主要部とした句であるとされているので, ここでも句の中に含めている。(一番最近の研究では, このInflも廃棄するらしいが, このことについては扱わない。)
- 7 大文字のUは, Haraguchi(1991)にならい, 無声化された高母音を表す。また, 形容詞のアクセントの付与規則の定式化はここでは扱わない。
- 8 主語のhiには主格を表す動詞がすでに添加されているが, 鼻音化は適用されていないものとする。以下の例においても, 助詞はすでに添加されているものとする。また, 動詞に過去の「-た」が付加する時のアクセント規則の定式化もここではおこなわない。
- 9 動詞のアクセント付加規則の定式化もここでは扱わない。
- 10 この例の数字については注1を参照。
- 11 「高母音無声化(High Vowel Devoicing)」の略。田中(1993b)では次のように定式化された。

Delete  $\alpha$  ( $\alpha$  = line 0 asterisk)

domain:

\* line 2

\* line 1

[C,-voice] ————— ([C,-voice]) #

詳細については, 田中(1993b)を参照。また, 大文字のIについては注7を参照。

#### 参考文献

- Chomsky, N. and M. Halle (1968). *The Sound Pattern of English*. New York: Harper and Row.
- Halle, M. and M. Kenstowicz (1991). "The Free Element Condition and

- Cyclic versus Noncyclic Stress," *Linguistic Inquiry* 22, 457-501
- and K.P. Mohanan (1985). "Segmental Phonology of Modern English," *Linguistic Inquiry* 16, 57-116.
- and J.R. Vergnaud (1987). *An Essay on Stress*. Cambridge, MA:MIT Press.
- Haraguchi, Shosuke(1991). *A Theory of Stress and Accent*. Dordrecht:Foris.
- 原口庄輔, 田中章 (共訳) (1993). 『強勢の理論』. 東京: 研究社.
- 田中章(1993a). 「標準日本語のアクセントの移動について」『静岡精華短期大学紀要』第1号. pp.41-52.
- (1993b). 「標準日本語のアクセント移動の再考」『言語学からの眺望』(福岡言語学研究会20周年記念論文集)(福岡言語学研究会編) pp.331-345. 九州大学出版会.